

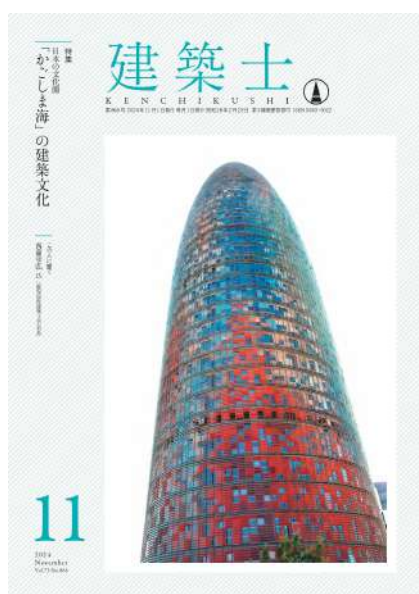
鹿児島城下「下方限」出身の明治政府高官らの生活空間

一級建築士、博士（工学）

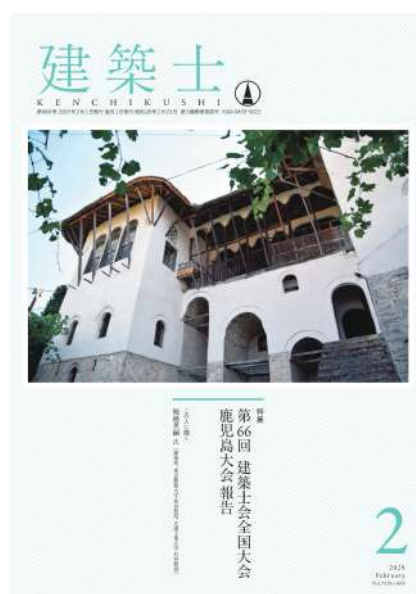
北尾靖雅（京都女子大学教授）

本稿は、筆者が、日本建築士会連合会が発行する会誌、「建築士」2025年2月号（第66回建築士会全国大会鹿児島大会報告号）に寄稿した論考（元論考）を基盤に、「建築士」2024年11月号（「かごしま海」の建築文化）に寄稿した関連する論考の一部を加え、題名を調整し再掲した論考である。岩倉具視旧宅跡に大久保利通公の京屋敷に存在した茶室「有待庵」の移築保存の経緯の一部を示し、同時代の明治政府の高官らの生活空間と併記することで、大久保利通公の生活空間を相対化することを目的としている。本紙面構成は紙媒体での発表の想定を行っているため、webでは読みにくいかも知れないが、ご容赦頂きたい。

なお、元論考と本稿執筆時（2026年1月）において、本稿の一貫性と目的のため、元論考に対して加筆と推敲を行い、さらに写真史料を補足している。本稿の再掲に許諾を頂いた日本建築士会連合会編集部に謝意を申し上げたい。



建築士2024年11月号表紙



建築士2025年2月号表紙

加治屋町^{ほうぎり}方限

かつて西鹿児島駅だった鹿児島中央の位置は鹿児島城下の西の端にあたる。この駅の近くに加治屋町方限と三方限（上之園町、高麗町、上荒田町）と呼ばれる地域がある。かつての鹿児島城下は上方限と下方限からなり、上方限は鎌倉時代に形成された鹿児島城下の武家町で、下方限は現在の鹿児島城の整備とともに開発された武家が住んだ城下西側の新開地から構成される¹。



写真1 加治屋町近隣の甲突川から桜島を望む

甲突川を軸に加治屋町、上之園町、高麗町、下荒田町などの「方限」が相互に隣接している。「郷」や「方限」と呼ばれる区域に分けられた鹿児島城下にて、「郷中」と呼ばれる区域（方限）ごとに子ども達を教育していた。郷中は現在の学区制度に相当し、「方限」は、近隣住区に類似する地域の概念と言えよう。そのなかで、加治屋町は「明治維新と近代日本を築いた偉人たちの誕生地」として観光拠点となっている²（写真1）。

高麗町で生まれた大久保利通は幼年時代以降、加治屋町で成長した。鹿児島士会の位置する新屋敷町も含め、これら下方限の地域を訪れると、我が国の近代化を担った人々の史跡に出会い、関わる建築遺産が全国に残っていることに気づく。

京都市の近代化は加治屋町で育った西郷菊次郎（西郷隆盛の子）が市長の時代に始まった（写真2）。加えて明治維新の時代を生きた下法限出身の明治政府の高官達の住宅も現存している。

本稿では、幕末から明治の下法限出身の明治政府高官達の偉人達の生活空間を掲載した。このことから、大久保利通京屋敷を相対的に観察する視点を得られることが期待できる。



写真2 琵琶湖疏水（京都市）

琵琶湖第二疏水の開削工事は京都三大事業の一環として、西郷菊次郎（西郷隆盛の子）が市長の時代に行われた。西郷菊次郎は奄美大島に生まれ、加治屋町方限で育った。

大久保利通の京屋敷

大久保利通は明治政府の参議、大蔵卿、内務卿などの要職に就き、日本の近代化政策を進めた。大久保は幕末の京に屋敷を持っていた。京屋敷は京都御所北東の「石薬師御門」の東にあり、屋敷には幕末の薩摩藩家老の小松帯刀寓居の「お花畑」（近衛家別邸）から大久保が移築したと伝わる茶室があった。この茶室で、王政復古の密議や戊辰戦争で使用された錦の御旗が調製されたという。この屋敷の見取り図や家屋の写真などが発見された³（写真史料1、2）。



写真史料1 大久保利通旧邸と茶室「有待庵」（大久保利泰蔵、出典；大久保家提供資料）

大久保の茶室が住宅新築工事で取り壊されるときに、地域の歴史家である原田良子が京都市とともに茶室の部材を保護した。その後、京都市は茶室を移築する計画を検討した。本茶室は、薩摩藩家老だった小松帯刀の京屋敷にあったが、大久保邸に移築されたことなど、茶室「有待庵」の歴史や経緯を原田は明らかにし、保存に貢献した。

本来的に茶室は建築の構造および構成上、組み立てと解体が簡易な移動可能な小建築物と考える立場から、「有待庵」は、保存に至る経緯を含めて、茶室の本質が保持されていることを見いだ

せる。大久保利通の生活空間の遺構は管見の限り残っていないので、貴重な建築遺構と言えよう。

明治維新後の京屋敷の所有者は大久保家でなかったが、大正時代に大久保利通の三男である大阪府知事の久保利武が兄弟とともに買い戻した。屋敷は大久保利武の所有となった。大久保利武は幕末の姿に復原し、大正天皇即位にあわせて公開した。大正4年の公開後の訪問者署名簿に大山巖、高島鞆之助（上之園町）、樺山資紀（加治屋町）、山本権兵衛（加治屋町）ら下方限の出身者の名が確認されている⁴。大久保利通を偲んで京屋敷を偉人達が訪問したと考えられ、大久保利通を通じて、下方限出身者達の交流は大正時代に至っても、継続していたことが把握できる。



写真史料2 大久保邸間取り図（原田良子撮影、提供）

東郷平八郎の官舎と庭園

東郷平八郎は加治屋町に生まれ薩英戦争、戊辰戦争に参加した。維新後に英国留学し、日露戦争で

は日本艦隊を指揮し「東洋のネルソン」と呼ばれる。広島の実には東郷の官舎が、横須賀には東郷が乗艦した戦艦三笠が残る。舞鶴海軍鎮守の初代長官時代の東郷の官舎と庭が舞鶴市に残っている（写真3、4）。

舞鶴の海軍施設を臨時海軍建築部が設計したので、英国建築士の称号を持つ桜井小太郎が官舎設計に関わったと推測できる。舞鶴で東郷が狩猟に出た折、舞鶴で改修中だった山本氏の庭を見た東郷は、庭師の橋本吉蔵氏から、庭が禅の思想による「一心池」であることを知った。東郷は一心池を取り入れた庭を官邸に作庭した。橋本は与保呂地区から石を集めた⁵。



写真3 海上自衛隊舞鶴地方総監部会議所・東郷邸内部（京都府舞鶴市）



写真4 東郷邸「一心池」（京都府舞鶴市）

他に、東郷は 1911 年に英国王戴冠式に出席したとき、軍艦を製造していたエルズウィック造船所の専務理事の邸宅⁶に逗留した。このとき、東郷は「自然のままで、むしろ荒れていると言いたいほどの庭園を大いに好んだ」ことを邸宅の庭師は残している⁷。これらのことから、英国の風景式庭園に当時の実業家や政府高官らが関心を持っていた当時、野趣あふれる庭園や禅の庭に東郷は関心を示していたことになる。農業や地域の産業振興を勧めた前田正名と東郷との親密な関係を示す書簡が残っている。二人の背後に園芸への関心が共有されていたと推測できる。

西郷従道の自邸と自宅跡の公園

加治屋町に生まれ戊辰戦争に参加した西郷従道は、西南戦争後に文部卿、陸軍卿、農商務卿を歴任し、第 1 次伊藤内閣の海軍大臣のとき日清戦争となった。東京都目黒区に西郷の邸宅跡が残り、跡地周辺は「西郷山」と呼ばれている。邸内には米挽小屋や養蚕室があり、庭では鶏や牛が飼われ、農家生活が営まれていたとされ⁸、大久保利通の高輪邸の農業指向の邸宅と類似する。邸内には洋館と和館があり、洋館は愛知県の博物館明治村で保存されている（写真 5）。

木造二階建ての耐震設計の洋館は、耐震設計が検討され始める契機となった濃尾震災前の 1880 年に建築されたことから、幕末の南海トラフによる安政東南海地震と安政江戸地震の経験によると推測できる。伊集院の設計⁹とされる和館は第二次大戦の空襲で消失した。薩摩藩で島津斉彬の側で建設事業に従事し、明治政府では宮内省工匠寮、工部省、海軍省で建設事業に従事した伊集院兼常と考えられよう^{10, 11}。



写真 5 大山記念館和館内部（栃木県那須塩原市）

この邸宅地を西郷が購入するとき、売る側にも何らかの事情があると思った西郷は、売却価格に金銭を足したとされる。なお、この邸宅は 1922 年に一般公開され、1937 年には重森三玲が庭園の実測図を描いた。現在、邸宅跡は東京都の菅刈公園の庭園として復元整備されている。さらに、那須の開墾地には本殿が石造の西郷神社とその鎮守の森が「加世田」という鹿児島 の地名とともに残る（写真 6）。

小さな石造の本殿は相当な地震で転倒する可能性はあるが、石像の本殿自体が崩壊するとは考えにくい。



写真 6 西郷神社鎮守の森（栃木県大田原市加世田）

大山巖の開墾地の住まいと防風林

加治屋町に生まれた大山巖は、幕末の寺田屋騒動で謹慎処分を受けた後、薩英戦争に参加した。フランス留学の後、初代陸軍大臣、日清・日露戦争では元帥だった。那須塩原の大山墓地で永眠する。大山は那須で西郷従道と開墾事業を興し大山農場を拓いた。那須拓陽高校は大山農場を受け継ぎ、高校が木造と煉瓦造の2棟の家屋を管理している。床が高いことや玄関が階段状の式台は薩摩の麓集落に残る武家住宅と類似する。和館は大山が鹿児島から招いた棟梁が施工したと伝えられている¹²（写真7）。



写真7 大山記念館和館内部（栃木県那須塩原市）



写真8 大山記念館の土塁と防風林（右手前が洋館で奥が和館）

建物を管理する栃木県立那須拓陽高等学は和館の床の改修が行われたことを示している。その

際に薩摩の伝統的な家屋の「うどこ」を失った可能性が考えられる。書院は薩摩の武家屋敷のようにトコザシでない。改修前に書院の長押にあった釘隠は紛失された。大山は那須の土を使い地元の建築用の煉瓦を製造した。洋館にはその煉瓦が使われている。石場建ての和館の基礎/礎石は一部煉瓦である。那須に住み始めた大山は、冬の厳しさを実感したので、地域の家屋のように屋敷の周りに土塁と防風林を築いたとされる（写真8）。住まいを気候風土に適応させ、地域の建設産業を興した大山の生活環境に対する視点を把握できる。

松方正義の別邸と農場

松方正義は下荒田に生まれ、明治政府では大蔵卿となった。日本銀行を設立した松方はデフレ政策による政府財政を健全化した功績が知られる。松方は「万歳閣」と称される別邸を那須ヶ原に建てた（写真9）。



写真9 松方正義別邸「万歳閣」（栃木県那須塩原市）

火山灰土の荒れ地が明治まで残っていた明治政府は日本三大疎水の一つの「那須疎水」を開削

し、開墾事業が進められた。那須野ヶ原の東北本線東側の大山や西郷の農場とは反対の西側斜面地に位置する赤松が自生する地域に松方の別荘がある。火松方の農場と別邸は疎水の上流部に位置し、この地を松方は千本松と名付け、農場を千本松農場とした。別邸は当初「松茂山荘」と呼ばれていた。家屋の1階は洋間で、天の間と称される書院は2階にある¹³。書院を洋館に取り入れ、1棟の建物に洋風と和風を同居させたこの住宅は、昭和初期以降の住宅の近代化の潮流を先取りしていると考えられる。

乃木希典・静子の住まいと樹林

乃木静子は新屋敷に生まれた、日露戦争時の陸軍大将だった乃木希典の妻である。明治天皇の崩御後に乃木希典とともに自刃した。夫妻の自刃後、東京市に寄付された敷地は高橋是清記念公園となり、家屋が残る。那須塩原市の乃木神社境内には家屋等の他、乃木静子が植林した樹林が残り、一部は天然記念物である。乃木自身が設計したとされる家屋の側に「静沼」と呼ばれる池が、今は公園として残る（写真 10, 11）。

静子の叔父である旧薩摩藩士の吉田清皎が所有していた那須の土地と家屋が乃木に譲り渡されたという。乃木別邸は大山と西郷の開墾場に近い。乃木は東郷と同じ艦船で英国に訪問したこと、薩摩出身者を妻の条件としたことなど、薩摩の人々に気持ちは近かったと推測できる。明治村の西郷従道邸の隣に学習院長官を務めた乃木の官舎が配置されていることも興味深い。なお、那須・乃木神社社殿の設計者は明治神宮の設計者である大江新太郎である¹⁴。乃木静子が那須の農場で木を植え、樹林を育てた背景に、ドイツでの研究により神宮の森を設計した本多静六の存在を

感じる。時期は異なるが乃木はドイツに留学していた。



写真 10 乃木希典別邸内部
(栃木県那須塩原市)



写真 11 静沼（栃木県那須塩原市）

人を以て城となす

生活空間は住み手の、人となりを感じ、知る手がかかりとなる。偉人達は明治政府の高官であろうとも、現代に残る生活空間は鹿児島に残る武家住宅と同等の水準の和風住宅といえよう（写真 12）。下方限出身の偉人達が着流しで生活をしていた風景や、偉人達同士の私的な交流が、残された家屋などからみえてくるようである。鹿児島には「人を以て城となす」との言葉がある。この言葉は、薩摩藩の領土全域の構成をも表現



写真 12 薩摩の武家屋敷内部（鹿児島県知覧）



写真 13 西郷隆盛自邸跡の公園（鹿児島市）

する概念である。西郷隆盛・従道誕生地のように鹿児島城下の下方限には近代化を導いた偉人に由来する史跡は残っている。故郷となる現地に建築遺産は存在しないが、また、偉人達の生活と結びつく庭園や樹林は全国に残っている。このことは、下方限出身者に通底する信念、意思、矜持などと矛盾しているとは思えない。

（2026年2月1日）

掲載写真は写真史料 1, 2 を除き筆者撮影

注釈

¹ 岩元俊一、楊村固、土田充義、「鹿児島城下下方限の設計寸法について：薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究 8」、日本建築学会学術講演梗概集 1990、1990 年 9 月、pp.937-938

² 鹿児島まち歩き観光ステーション（鹿児島観光コンベンション協会）。

³ 原田良子、「富岡鉄斎「大久保利通旧邸と茶室『有待庵』図」発見」、美術の窓 2024 年 7 月号、pp. 136-138、2024 年 7 月

⁴ 原田良子、前掲

⁵ 舞鶴地方総監部会議所の掲示物。与保呂には旧海軍水道の岸谷貯水池（日本遺産）がある。

⁶ 邸宅は英国東北部の工業都市であるニューキャッスル・アポン・タインにあった。

⁷ マリー・コンティハイム（岩崎孝雄訳）、「イギリスと日本-東郷提督から日産までの日英交流」、サイマル出版会、1990 年、p. 37、p. 90

⁸ 鹿野陽子、他、「東京都目黒区・旧西郷従道邸庭園に関する造園生活史的研究」、ランドスケープ研究 61 巻 5 号、p. 390、p. 392、1997 年

⁹ 鹿野陽子、前掲

¹⁰ 平山育男、「伊集院兼常の官界・実業界における前半生について」、日本建築学会計画系論文集、第 85 巻、第 769 号、pp. 699-705、2020 年 3 月

¹¹ 矢ヶ崎善太郎、「伊集院兼常の人物像」、日本建築学会学術講演梗概集（九州）F-2 建築歴史意匠、p.397、1998 年

¹² 別邸内部は数寄屋と判断できることから別邸の建設で伊集院兼常が関わっていたとも推測できる。平山育男によると、伊集院兼常は数寄者として茶人との交流や小川治兵衛との交流があったという（平山育男、前掲）。小川治兵衛は伊集院兼常から庭園を学んだことや、伊集院は西洋建築を学んだという（矢ヶ崎、前掲）。伊集院兼常が風景式庭園を学んだ確証はないが、薩摩藩での活動を通じて西洋庭園を理解していたと考えられ、風景式庭園の概念を日本で示したと考えられる。大山別邸の和館の台所が別棟で、和館が 2 棟で構成されていることは、鹿児島の伝統的の家屋の構成と類似する。

¹³ 那須野が原博物館の掲示物。

¹⁴ 那須乃木神社が資料館で所蔵している写真史料。